

連載 中小企業応援団 食いついたら離さず

政策研究大学院大学
名誉教授

橋本 久義

宮田和久 エムアイ精巧社長 他社が出来ない金型造る

テレビで見た師匠に強引に弟子入りし 試行錯誤の末に日本一の金型と評判を

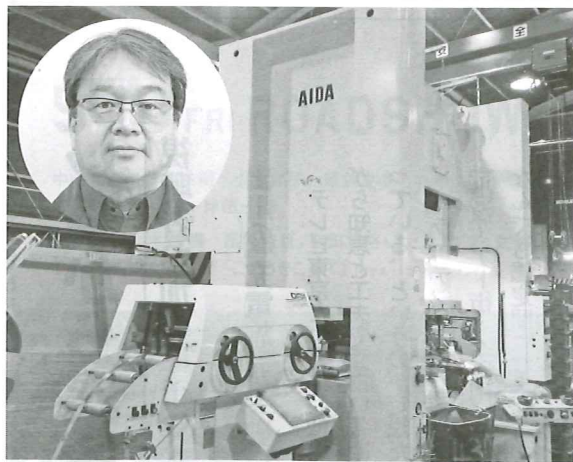
「世の中カネだ」と大学中退し

金型開発からプレス加工までを手掛けるエムアイ精巧の社長・宮田和久氏は、テレビを見ていて驚いた。「プレス屋くらい儲かる商売はない」といつている社長がいる。外車乗り回し、豪快に暮らしている。それに比べて俺はどうだ。父のプレス屋を引き継いで3年。悪戦苦闘したが、どうやって儲からない。「これは話を聞いてみなくちゃ」と素直に思うのが宮田氏の良いところだ。

そこで電話を掛けたり、手紙を出したりして何度も申し込んだが断られる。普通の人ならめげてしまうのだが、そこは元不動産屋仕込みの宮田氏。30回目ぐらいの電話でやっと「じゃあ会ってやるから一度来なさい」といわれて弟子入りした。

ねて継ぐことにしました。'92年頃のこと、不動産にも陰りが見えてきたときでした(宮田氏)

宮田氏が入ってから、社名を「エムアイ精巧」とした。Mは宮田だが、Iはインターナショナル＝国際的な仕事ができるようにという意味だ。また「巧」を売り物にしたかったのだ。精工ではなく、「精巧」とした。「オヤジは本当に古いタイプの職人で、金型はオヤジが独立したときに一緒に独立した仲間からずっと買っていました。でも精度が悪くて耐久性もない。納期もデタラメ。それで



エムアイ精巧のプレス設備と宮田和久社長

しかし自分で弟子だと思っただけで、師匠は何をしてくれる訳でもない。だがチャンスが来たら食いついて離さないのも不動産屋仕込み。ちょうど叔父がドイツ製の工具・器具類の輸入業をしていたので、毎週珍しい工具を持っていった。師匠も職人だから人一倍興味がある。「面白い。どうやって使うんだ」と感心されているうちに、家族とも打ち解けて、いつの間にか家族旅行にも一緒に行くようになった。

エムアイ精巧の前身である宮田製作所は1967年に、金型工場で働いていた父が24歳で独立し創業した。創業というところからは良いが「蹴飛ばし」と呼ばれる、足の力でプレスする機械を2台買って、下請け仕事を始めたということだ。長い間、殆ど父と母の2人でやっ

私が入ってから、自社で金型を造つた方が良いんじゃないかと中古の機械を買って、金型人材を募集しました。ちょうどバブル崩壊のときで、リストラされた職人さんが沢山いたので雇って造り始めたのですが、金型職人はみんな個性が強くて、なかなか上手くいかなかった。こうして悩んでいるときに、「プレス屋は儲かって仕方がない」というテレビを見たという訳だ。

「師匠からは本当に色々教わりました。設備が無くて、金が無くても、技術が無くて、材料が不足でも、与えられた条件の中でどうやって勝っていくかを教えてもらいました。ある会社の手形をずっと取りに行かなかったんです。そしたら『エムアイ精巧って、どういう会社だろう』と評判になって、それ以来すっかり信用が付きました。これも師匠直伝です。そして儲からない仕事から、儲かる仕事にシフト出来るようになった。ボディや携帯電話の金型が造れるようになって、一時期は

ていた。人を募集したこともあるが、当時は人手不足で零細企業に来る人は少なく、来てはすぐに辞めてしまう。結局、2人きりでやっていた。

父も母も指先を機械に挟まれて失くしていた。「機械も餌が欲しいんだよ」という冗談が悲しかった。

宮田氏は元々医者になりたかったが、学資も足りないし、何より偏差値が足りなかった。薬学部に入学した。しかし勉強は面白くない。

そんなときに出会った友人が不動産屋で、いやに羽振りが良い。2人で痛飲したときに「何だかんだいっても、世の中やっぱカネだよな」という話で意気投合して、若気の至り。大学を中退し不動産の世界に飛び込んだ。ときはバブルの真つ最中。デベロッパーは豪快な商売で、仕事が上手くいけば儲けも大きい。巨大な

すぐ儲かりました(宮田氏)

ところが、リーマンショック後は状態が良い時期にお金を借りるだけ借りていかなかったら、持ち堪えられなかっただろう。宮田氏が偉かったのは、この苦しい時期に「これからの金型」ということで、新しい金型に次々にトライしたことだ。「あの時期は、金型はこんなに割れるのかというぐらい割りました。スイッチを入れるときに身を隠しておかないと、破片が飛んできて危ないこともありました。この試行錯誤が後々の開発に大いに役立ちました(宮田氏)

頭蓋骨が折れるほど考え抜け

宮田氏のポリシーははっきりしている。周りを見渡して誰もやっていない分野を探し、さらにそれを小さく切り取って、その分野のトップになることだ。

ある会社が、ステンレスの2枚合わせの部品を1部品に出来ないかといってきた。某大手メーカーの担当者が「エムアイ精巧なら出来るんじゃないか」といつてくれたらしい。ここで「出来ない」といつたんじゃない

ビルが自分の力で出現するなど面白かったし、やりがいもあった。

苦しむ母を見かねて家業継ぐ

ところで不動産屋は土・日が書き入れ時で、平日が休みだ。休みに家にいると、両親にいわれて家業を手伝わざるを得ない。手伝っていると母が父にいつも怒鳴られている。「母は教育者の家庭のお嬢さんで、お茶もお花も師範の免状を持っています。息子の私がいうのも変ですが、いつもバッチリ化粧していて、本当に綺麗だったんです。その母がボロを着て、汚いジーンズ履いて、私が中学生のとき使ってた汚い運動靴を履いて、オヤジに怒鳴られているのを見て、可哀そう。母には『プレス屋にだけはなるんじゃないよ』といわれていたのですが、見るに見か

男が廃ると思ひ、訳も分からず「出来ませ」といつてしまった。苦勞したが出来た。

またある会社が「問い合わせた2社とも『出来ない』といつてきたんだよ」といつので「じゃあ私がやりましょう」といつたのに、「実績がない」と断られてしまった。「それじゃあタダでもやってやる!」と挑戦し、出来た金型を持っていったら喜んで使ってくれた。それ以降、取引が続いているという。

「この間も、試作で造った金型を本型に流用したので、本来なら800万円ほどの製品が、400万円で作りました。だから相手に『400万円でもいいですよ』といつたら、相手の部長が『800万円でもいい』という。『いや要りません』と押し問答を繰り返していたら、『あの会社は凄い』と評判になりました(宮田氏)

今は日本を代表する金型職人として、業界でその名を知られている。「自分を背水の陣に追い込んで、頭蓋骨が骨折するくらい考えなければ良いアイデアは出てきません」といつ宮田氏は、今後も新しいアイデアを実現し続けるに違いない。